上 検証

AMDAインド西部大地震緊急派遣

救援機飛ぶ

かけ

迅速にチャーター決断

物資集まる確証ないまま

インド西部で大地震が発生、多くの死傷者が出ている模様―。

世界各地の災害・紛争地で被災者の医療救援活動を続ける国際医療ボランティア・AMDA。地震発生当日の一月二十六日、岡山市楢津の本部にファクスが入った。

AMDAは緊急医療救援を検討し、早速、岡山市の医師三宅和久さん(三八)やインド、ネパール支部からの医療チーム派遣を決めた。救援体制の準備や現地との情報のやり取りなどで慌ただしさを増す本部事務所の一角に、菅波茂代表(五四)もいた。

「被害があまりにも大きい。しかも夜間は冷え込む。毛布などの救援物資を空輸できないだろうか」

発生から三日後の二十九日、菅波代表は〝かけ〟に出た。救援物資が寄せられるかどうかの確証もないままに、十七万ドル(約千八百七十万円)でロシアの航空会社から貨物機をチャーターした。刻々と伝わる被害の大きさ、被災者の苦しみに後押しされての決断だった。

物資空輸という大型の人道援助プロジェクト。AMDAは過去二回、岡山空港を舞台に、このプロジェクトを実行している。一回目は一九九五年六月、サハリン北部を襲った大地震の時だった。二回目は翌九六年二月、同じく大地震に見舞われた中国雲南省の被災者救援に向かった。

インド西部地震の被災者救援のため、AMDAが貨物機を手配。物資とともに重機も積み込まれた＝1日、岡山空港

毛布、衣料品、食料…。救援物資は、AMDAの呼び掛けに岡山県内各地のさまざまな民間ボランティア団体や自治体などから寄せられた。温かい支援の背景を、菅波代表は「あの阪神大震災の時に見せた岡山県民のボランティア精神の盛り上がりがあった」と振り返る。

サハリン地震直前の九五年一月十七日に発生し、六千人を超す死者を出した隣県での大震災。県民挙げて義援金集めや物資の搬送、さらに現地での支援活動などを展開し、被災者を助けた。このボランティア熱の高まりが、サハリンや中国の被災者救援にも向けられた。

「あれから六年。月日を経たいま、当時の熱いボランティア精神は、今なお県民の胸に宿っているのだろうか。果たして救援物資は集まるのだろうか」

菅波代表は不安だった。手配した航空機が岡山空港に到着し、後部のハッチがゆっくりと開く。だが、運び込む物資が何もない―。そんな光景も頭をよぎったという。

現地の医療チームからは、けが人の手当てのための医薬品、寒さをしのぐ毛布など物資の不足が伝えられた。一刻も早く救援機を飛ばすため、出発日は航空機派遣決定から三日後の二月一日に設定した。物資を集めるには一月三十、三十一日の二日間しかない。

菅波代表らは岡山県内外に物資の提供を呼び掛け始めた。それは、岡山という地方発の国際貢献が真に根付いているかどうかが試される取り組みでもあった。

◇

冬の日がとっぷりと暮れた今月一日午後六時半すぎ。ごう音を残して、AMDAの用意した一機の貨物機が、岡山空港から大地震に襲われたインド西部に向けて飛び立った。AMDA五年ぶりの救援機派遣に際し、迅速な物資収集や飛行手続きなど被災者支援にかけた関係者の思い、プロジェクトの遂行を検証する。